

巻頭言

環境再生の時代

島谷 幸宏



一時、12羽まで減り野生個体が全て捕獲され、飼育施設で保護増殖が行われていたコウノトリは2005年末、野に羽ばたき、野生復帰への第一歩を踏み出した。現在は、100羽以上に増えたコウノトリは順次野生に戻す計画になっている。

2002年に自然再生推進法が成立し、全国で様々な自然再生への取り組みが始まったが、まだまだ試行錯誤の段階である。コウノトリの野生復帰はその中でも順調に進んでいる事例である。

豊岡市は「コウノトリと共に生きるまちづくりのための環境基本条例」を制定し高らかにコウノトリと人との共生をうたった。この条例の中で「私たちは、人がコウノトリと共に生きていくことができる環境こそは、人にとってもすばらしく豊かな環境であるとの確信に至るのである。」とその理念を示している。この視点は人間中心の価値観で進められてきたこれまでの街づくりに、生き物の視点を通して暮らしや環境を問い直すという基本的で画期的な考え方の転換が盛り込まれている。

農や暮らしのあり方を、コウノトリが生息できる環境という視点から見直すことによって持続的で循環型の社会の構築を行うというのである。20世紀型の開発中心の国土形成とは大きく異なる思想の転換である。農業においては減農・無農薬農業に取り組み、コウノトリ米がブランド米として生産されている。円山川の激甚災害復旧事業においては、河道掘削に際しコウノトリの餌場として湿地的環境を再生している。また、教育の現場においてもコウノトリについての環境教育が実践されている。このほかにも多様な取り組みが実施されている。人とコウノトリとの共生こそが今後の豊岡の目指すべき方向であることを市が示し、地域の人々はそれを共有し、農や教育、公共事業など様々な分野でその考え方が定着し、それに向けた手法が模索されている。

豊岡の自然再生がうまくいっている基本的な理由

は、地域の中で人とコウノトリが共生する暮らしという理念が地域社会に共有されているからであると思う。他の地域における自然再生は、地域との関係においてギクシャクとした事例も多々見受けられるが、それは地域における多様な関係者との合意が不十分であることに起因する。自然再生において、最も重要なポイントの一つが社会的な合意形成であることは近年、自明となりつつある。「自然再生は生き物が生息できる空間を再生すること」と狭く捉えがちであるが、コウノトリの例で見てきたように、自然再生は国土のあり方あるいは暮らし方を根本的に問い直す広がりを持った取り組みであることがわかる。

さて、以上のような自然再生とともに、景観再生に対する国民の期待も大きいものがある。20世紀後半、我が国は急激な高度成長、人口増加に対応するために大量の社会資本がかなり緊急的に整備されてきた。たとえば私が専門とする河川の分野では、人口増加を沖積低地で受け入れるため、河川改修は洪水防御に対する機能増強に特化した整備が緊急に行われてきた。河川整備は、洪水防御、水供給、景観や自然環境などの機能を総合的な観点から最適化する整備が行わなければならないが、このような総合的な観点から十分に行われてきたとは言いがたいのが現状である。確かに洪水は減少したが、地域はそれだけでは豊かにならないのである。時代は変遷し、人口は減少の過程であり、経済の急激な発展もありえない。そのような中で、当然社会資本のあり方も変わっていかなければならない。地方では、観光が重要な産業となりつつあり、情緒あふれるその地域ならではの景観への再生の期待が高い。多くの地域で、河川や海岸運河を再生したいという話を耳にする。

今後地球環境問題がどのようになっていくのか、不透明な課題も多いが、21世紀が環境再生の時代であることはまちがいない。